

## 青山胤通家関連文書(2)

### 青山文書の会

#### [13] 賀古鶴所の書簡(前承)

2 明治37年4月5日 (11号)

(封筒表) 東京本郷弓町

医学博士 青山胤通殿 御中 (軍事郵便)

(封筒裏) 封 四月五日

広島第二軍兵站軍医部長 賀古鶴所

尚 広島の所在ハ大手町四丁目村上方ニ候

拝啓、出発前には御訪ニ与かり誠ニ有リ難ク奉存候、私よりハ甚御不沙汰ニ打過キ申訳御座なく候、数日前在ブルツセル加藤公使<sup>(1)</sup>より写真葉書をよこし候、相変わらずたばこを手ニ採り居られ至極御壮健のやうニ見上げ候、承はれば今月中旬頃御帰着の由、大慶ニ奉存候、此度の私の務めハ第二軍兵站軍医部長と申役目にて、手もとに病院をいくつも置き候事ニ候、赤十字社の人々や其外先年宇野教授<sup>(2)</sup>が大学より戦地ニまいられたるやうニ、大学より人々まいられ候へば、此度ハ私がいろいろ御世話をいたすことニ候、少しく先きにまいり候はゞ外科の達人遊びニ来てくれ候はゞ格別ニ便宜を与へ候て、充分ニ研究することの出来るやうに取り計ふ心組ニ候、で、先達実は佐藤三吉君<sup>(3)</sup>を勸携<sup>(ママ)</sup>いたし候処、御宅が御帰りになると此度は三吉君が西洋へ見物ニ行かれる番ニなつて居られる由ニ候ハ、小生の思ふには西洋ハ何年後ちにて遊びニ行かるべく候へども、銃創の研究ハさうはまいるまじくと被存候、それに敵の方にてハ此際必らず外科の達人出張いたし候て、戦後には立派なる報告を欧州の医学界に出すべくと推察いたされ候、腕で勝ちても学問でまけてハならぬと存ぜられ候、それ故ニ我方にては彼れニ勝れたる成績を上ぐる人を得度と存ぜられ候、然し種々と規則が有之候て表面からは彼れこれ自由ニ(働らく人ニ)ならぬ様の點も有之候へども、此度ハ森<sup>(4)</sup>と小生と兩人にて舟を操つる事ニ候間、

手加減にてどうでもなり可申候、自然大学の腕きゝが出張いたさるゝやうニ相成り候はゞ十分ニ便宜を与ふ可き心組ニ候間、御帰着ニ相成り候はゞ乍憚此書状御目にかけ下され度奉願候、私共どうかすると二十(日)頃迄こゝに滞在いたすやも知られず候、○自然御書面を下され候はゞ私共何の地にありても唯第二軍々医部長 森林太郎殿、又ハ第二軍兵站軍医部長 賀古鶴所と御認め相成り候へば地名は御認めなくとも到着仕るべく候、先は御挨拶迄ニ大「ボウ」<sup>(5)</sup>によるしく、早々頓首

四月五日

鶴所

青山様 御中

- (1) 加藤 加藤恒忠か。安政6年1月松山藩士家に生まれる。パリ法科大学に学ぶ。外交官として活躍。後に大阪新報社長兼主筆。貴族院議員、松山市長を勤める。大正12年3月没。享年65。(1859-1923)
- (2) 宇野朗<sup>ほがら</sup> 嘉永3年伊豆国に生まれる。明治9年東京医学校(東大医学部)卒業。明治19年東大外科教授。30年退官。楽山病院開業。昭和4年没。享年80。(1850-1929)
- (3) 佐藤三吉 安政4年美濃国大垣に生まれる。明治15年東大医学部卒業。明治26年帝大医科大学外科教授。37年当時は東京帝大医科大学付属医院長。後に初代日本外科学会々長。昭和18年没。享年87。(1857-1943)
- (4) 森 鷗外(森林太郎)の事。
- (5) 大「ボウ」青山胤通の長女芳<sup>よし</sup>の事。明治24年4月生まれ。養嗣子の熊谷徹蔵と結婚する。昭和53年没。(1891-1978)

3 明治37年4月13日 (2号)

(封筒表) 東京本郷弓町 青山胤通殿 親展

(軍事郵便)

(封筒裏) 封 四月十三日

広島市大手町四丁目 村上方

第二軍兵站軍医部長 賀古鶴所

拝啓、もはや御帰朝<sup>(1)</sup>の事と恐察いたされ候、兵器も先年とは異りをり、従て創傷にも変態を来すべく候、内臓骨等の創はレントゲン光線を用ひざれば明に知ること能はざるべく候、而して軍には此器を備へず候、自然佐藤君<sup>(2)</sup>若くは他の外科博士出張せらるゝ折には此器を携行せられ度と存じ候、戦場といふ外科の新材料に富みたる所を省ミずして欧州の巡遊に赴かれ候事ハ国民の意趣のいかんといふ問題はしばらく置き、研究上撰地ニ於ていかゞ可有之歟、魯土の戦争の折にはベルグマン魯軍に従ひ行き、普仏の役にはビルロート普軍ニ従ひ行き候、此度も必らず独乙の外科博士の魯軍ニ従ひ行くものこれあるべくと推察致され申候、佐藤君の我が第二軍に來られんことを偏ニ希望いたし候、我軍は此の先き必らず外科の材料ニ富むべくと被存候。○御携來のたばこあらば一箱御割愛を請ふ、此地には一週日位は逗留致すべき歟、大ぼうに宜敷、早々頓首

四月十三日

鶴所

青山賢兄

(1) 青山胤通は明治36年5月よりドイツを始め欧州各国及びアメリカを歴訪、翌37年4月帰国する。

(2) 佐藤 佐藤三吉東京帝大医科大学外科教授の事。

4 明治37年4月20日 (28号)

(封筒表) 東京本郷区弓町二丁目 青山胤通殿 親展

(軍事郵便)

(封筒裏) 封 於広島 第二軍兵站軍医部長

賀古鶴所

拝啓、御手紙煙草相次で着、御芳志辱奉存候、二た箱森君ニ分ち候、彼地ニ到着後蓋を開く可くそれ迄はあだにはふかすまじく、森も同感ニ候、出発前小池<sup>(1)</sup>を問ひ候て色々注文をつけ候際ニ彼曰く、平常大学の人々に荣誉職名を附け置かざり

し為め、斯る折ニ任用するに窮すと、小生曰、好機なり此際行ふべしと、ブラジル品切れの由、惜しき事を致し申候、好き品御見附けニ相成り候はゞ留守宅へ御教示下され度、追送の道はつき居り申候、御賢察の通り此度は傷病者共に征清の時よりハ多かるべく候、挙国一致各自得意の方面に当りて尽力致さず候てハ好結果を挙ぐる事能はざる可くと被存候、黴臭き小吏根性は全然撲滅せずは相成るまじく候、此上ニ於ても何卒御尽力下され度希ひ上げ候、戦勝後学問のひの木舞台ニ於ても彼の国のを圧倒いたし度き事ニ御座候、御序の節佐藤君へ宜しく願ひ上げ候、小生ハまだ一週間位は逗留いたすべき歟、千朶木<sup>(2)</sup>は此状貴手ニ触るゝ頃ハもはや此地には居らざるべく候、軍隊の行くを見て小兒等声を囂らして万歳を唱へ候、健気なる後継者あり、我等ハ安じて行く可く候、御令聞、大ぼうに宜しく、早々頓首

四月二十日

鶴所

青山契兄 梧下

(1) 小池正直 鶴岡藩医の長男として生まれる。賀古と同期の明治14年東大医学部卒業。明治37年2月より満州軍兵站総軍医部長。38年陸軍々医総監。

(2) 千朶木 千駄木。森鷗外の留守宅。ここでは森鷗外を指す。森鷗外は4月21日広島より満州へ出発する。

5 明治37年5月20日 (24号)

(封筒表) 東京、本郷区弓町 青山胤通殿 親展

(消印 東京・本郷・37・5・22)

(軍事郵便)

(封筒裏) 封 五月廿日 於広島 賀古鶴所

拝啓、長らく当所の山水ニ親しミ罷在り候処、愈本日あき丸に乗りこみ、あきにあきたる地を去り候、營口にハ昨年も六・七月の交ニペスト流行致し、一週間ニ百余の患者を出したる由、安藤検疫事務官(先日來本市之衛生事行<sup>(マ)</sup>に付き來県)より承はり候、其外にも散在候やニ候、軍の進むにつれて斯る危険なる地逐次小生等の配下に属すべく候、就てハ貴著ベスト一部御惠贈下され度願ひ上

げ候、又予防、消毒等につきて在り来りの方法外ニ妙策も有之候はゞこれ亦承はり度候、乍憚緒方君<sup>(1)</sup>にも此儀御申次ぎ下され度奉願候、書物等ハ小包郵便にて御送り下され候はゞ到達いたすべく候、たばこはさうは参らず候、但し留守宅より追送品<sup>お送り品</sup>と申候て自かたを量りて毎月一回多少の物品を野陣ニ送ることを得候、佳品あり候はゞ留守宅迄御とゞけ下され度、唯今かき次て行く中ニ号外飛来、初瀬<sup>(2)</sup>、吉野<sup>(3)</sup>の不幸を報ず、憤慨に耐へず候

五月廿日 出発にのぞみて 鶴所  
青山契兄 梧下

自然御書を給はり候ハゞ、単ニ「第二軍兵站軍医部長賀古一」と御認め下され候へバ地名の肩がきハ無之候ても達し可申候、御令聞並ニボウニよろしく願ひ上げ候

- (1) 緒方正規<sup>まさのり</sup> 嘉永6年生れ。明治13年東大医学部卒業。明治19年より大正8年まで帝大医科大学衛生・細菌学教授。大正8年7月没。享年67。（1853-1919）
- (2) 戦艦初瀬 明治37年5月15日旅順港沖にて機雷に触れ沈没。
- (3) 巡洋艦吉野 明治37年5月15日巡洋艦春日と衝突沈没。春日艦は大破。

6 明治37年7月22日 (25号)

(封筒表) 東京本郷弓町二丁目 青山胤通殿 親展

(消印 第二軍 37・7・22・第一外戦郵便局)

(消印 東京・本郷・37・8・1) (軍事郵便)

(封筒裏) 封 七月廿二日

第二軍兵站軍医部長 賀古鶴所

拝啓、六月廿四日の御書七月七日ニ着、久々にて物語を得し如クニ覚え候、其歎びを分たんとて遙ニ前方ニ在り候森君方へ御書を転送候、我が軍ハ多少之赤痢、腸加多留、脚気、チフスは見当り候へども概して健康ニ候、一戦毎ニ傷者夥しく生じ候、此際名医ノ援助を得候ハゞ軍の幸福ハ無量なるべく候、名義のいかに拘らず名医をして遠征の途ニ上らしめ得候やう、此上とも御尽力を願はしく候、当路者と雖拳国一致の言下ニ敢て拒むこ

と能はざるべくと被存候、在広島佐藤進君<sup>(1)</sup>の書中ニ部下ニ於て信頼すべきものハ独り田中苗太郎<sup>(2)</sup>一人あるのミ、現ニ中央部ニ向ひて良医を強請中なりと見え候、あづかりをる患者ハ数千人なる郷国の予備病院ニして既ニ如斯ニ候、仮令ひ前方野戦隊ニハ芳賀の如きもの一兩輩ありと雖、後方なる兵站部ニハ絶無といふも可なるべく候、元来兵站部の衛生機関ハ逐次患者を後方ニ送り船ニ移し、先以て広島ニ向け還送するを旨とすとハ雖、いかニ野戦隊に於て当初適切なる治療を行へバとて転々後送する間ニハ種々なる変症を起すべきハこれ自然之数ニ候、将又内科諸病ニ於てハ兵站管区内ニ発病候もの前方なる野戦隊ニ於けるよりハ多きを常といたし候、野戦隊といふハ即ち敵ニ対抗しある各師団のものを云ひ、兵站部とハ其陣地より後方上陸地点迄を指して云ひ候、軍の進むにつれて兵站の管区ハ愈延長候、而して管区内にハ守備隊諸縦列隊等日夜間断なく劇務ニ服し居り候のミならず、補充兵等未だ蕃地ニ慣れざるもの、其外パッサント少からず、従て此等の病むものも甚だ尠からず候、既ニ小生配下ニハ六七百人を容るべき病院三つ、三百人を收容し得べきもの六つを設備候、此間ニ外科之名士在らバ枯骨にも閔を生ずべく内科之名士あらバ空しく恨みを呑<sup>(ママ)</sup>ミて郷国に還送さるべきものも愉<sup>(ママ)</sup>えて復ひ戦列ニ入ることを得べく候、勿論兵站部ニも相応なる軍医ハ配属せしめられ在り候へども、小生唯偏ニ名医を渴望候儀ニ候、可相成ハ教授、助教授諸君の中、若クハ止むことを得ずバ数年勤務せし助手にて腕前確なるもの数人来り会しくれ候ハ、好都合ニ候、右御含みにて可然御運策之程奉希候、以上の儀ハ敢て秘すべきニハ非ざれどもされバとて世間へハ知らせ難く候、且つ当路者の機嫌を損じ候てハ何廉不便なること少からず候、何卒御内聞ニ願ひ上げ候、煙草御恵贈下され候由、追送品を待つこと実ニ一日千秋の念ひあり候、此際凡医界ニ於ても多少之活動を見べき歎近況いかゞ、嘗て目下の医育ニつき卑見の概要を佐藤三吉君ニ申述べしことあり候、御序ニ御聞きとり下さるべく候、ブルツセルにて加藤<sup>(3)</sup>と共ニ郵便はがきニうつされたる写真廻りて当地ニ達し候、加藤の酒杯を

手ニせる、学兄の煙草を摘める、共ニ飲飲ニ耐へず候、当地昨今雨期ニ入り蒸熱凌ぎ難く候、幸ニ強壯健啖、乍憚御放念下さるべく候、世人輒すれバ上村艦隊<sup>(4)</sup>を非難候へども、各自任務を分担シ且つ相連繫して作業候今日ニ於てハ、時ニ或ハ己が任務のミの爲めニ憤慨して単独ニ行動せんと欲すと雖大体の計画ハ決してこれを許さず候、小生ハ寧今の立ち場ニ在る上村氏之心情を推察し同情の涙を禁するコト能ハざるものニ候、大ボウに何か陣中ミやげをと思ひ候へども、見にくき捕虜と牛車の外ハ何もかも未だ眼ニ入らず候、但當普蘭店<sup>(5)</sup>ハアトレス灣ニ接し候て島山遠近ニ散見シ唐画にておなじみの高嶺連山ノ奇態変妙なるあり、渺々たる青野にハ驢騾犢牛点々数百散在候なぞ誠ニ好風景の地ニ候、写真器あらばせめてこれなど写して送り度と思ひ候こと屢なり、乍末御令聞へ宜しく御申伝へ下さるべく候、早々頓首

十月廿二日

鶴所

青山学兄 榻下

小川町<sup>(6)</sup>よりいろいろ御面倒なる儀を申出づ可くと被存候、よろしく

- (1) 佐藤進 順天堂当主。明治37年5月広島予備病院勤務。翌38年6月より10月まで陸軍軍医総監。
- (2) 田中苗太郎 明治2年生まれ。明治24年帝大医科大学卒業。明治37年5月佐藤進と共に広島予備病院付外科主任。41年12月より佐藤進の後任として大韓医院第2代目院長を勤める。43年12月没。享年42。(1869-1910)
- (3) 加藤 加藤恒忠か。この写真は青山胤通は欧州出張中の時のもの。
- (4) 上村艦隊 上村彦之丞<sup>かみむらひこのじょう</sup>第二艦隊司令長官が率いる艦隊。戦艦初瀬等の事故を指す。
- (5) 普蘭店<sup>ふらんてん</sup>は清国遼寧省大連市に位置する。
- (6) 神田小川町に賀古の経営する賀古耳科院がある。

7 明治37年11月26日

(13号)

(封筒表) 東京本郷弓町 博士青山胤通殿 親展

遼東守備軍軍医部印 (角印)

(封筒裏) 十一月廿六日

遼東守備軍 軍医部長 賀古鶴所

拜啓、其後甚御不沙汰御免下さるべく候、毎度たばこ有り難く此後も折々御惠投を仰ぎ候、小生現時の受け持ちは遼陽より南方当青泥窪間にして、つまり各軍の兵站勤務を一括して受け続き候、爲めニ大なる病院は七千を容るべきもの二つ、小なるは二千を容るべきものより数百を容るもの迄数多く抱き居り候、此の患者の還送方にハ列車、汽船、病院船等にて埒をつけをり候、従て良医を渴望すること頗る切ナリ、御承知之通り東京出発前よりいろいろ心配いたしたる甲斐もなく、名医を兵站部ニ入るゝこと、どうやら水泡ニ歸したるやうニ推察いたされ申候

I

II

III

野戦車部員

兵站部

予備病院

遼陽

ダルニー (大連)

宇品

N.Iにハ兎ニ角軍医が居り候、N.IIIハカラ明きなりしを、頃日ニ至りてN.Iより軍医を抜き取りてこれに充てたるもやうなれども、井中ニ一と摘みの砂糖を投じたる程の妙味もあるまじくと被存候、而してN.IとN.IIIとの中間なる兵站部ニは最も医の手を要すべきニ、返て此所にハ薄弱ニ候、而して此度小生が一括して握りたる区域ニ候、元来ならばIニ若し多少の余裕あらばこれをIIニまはし、IIIハ郷国の医友の手ニ其治療を委ぬるを目下の情況ニ於てハ至当と被存候、小池氏<sup>(1)</sup>当地へ出張の節、此儀充分ニ説く可くと存じたれども余事ニつきて其説く所を聞くニ、マルデ訳がわからず、些とデメンチア<sup>(2)</sup>でも思ふるにハ非らずやと念はれ、且つ不快の念を抱きたる爲め、其まゝに過ごしたり、其砌にも氏曰く、大学達や医事新聞達がやかましくいふから予備病院ニ採用するやうニなせば、其所説の盛なりしにハ似ず、唯岡山の医学校のもの二人許隔日ニ執務したしと申し出せるのミ、あきれるでハないかと、生曰く、果して然らば裏面ニ何かわだかまりが在るのであるふと、彼曰く、どうして實際ハコチラも大ニ困るのである、予備病院の非難の声ハ高い、ソレで此度も野戦隊ヨリだいぶんニ軍医を採つて国ニ歸へしたと、兎ニ角頃日ハ救護班ハ既ニ尽き、見習医官



の暮(ママ)にすら応ずるものなきニ至りたるやニ聞く、斯の如くなりてハ學術のいかんはしばらくさし置き、此後軍医の補充の道はどう明くであらふかと心痛いたされ申候、平常も軍医の補充ハ諸学校へ依頼しあるにあらずや、此の際ニ於て其師たる人、学友又は民間有志の医師の協力を得て業を済ますニ於て何の疾シき所あるべき歟、歓び迎へそれぞれ相応なる敬意を表すべきにて候、彼れの魯鈍なるにハ実ニ一驚を喫し候、何とか一と御工夫下され候て諸君の心を和らげ、せめてハ予備病院の業なりと援助下され候やう、御配意之程偏ニ希望仕候、つまりハ傷病者に実以て気の毒千万ニ候、見るニ忍びざる惨状もこれあることニ候、将又御都合相成り候はゞ当軍兵站病院へは外科内科の術ニ長けたる方を各四人ばかり御さし向け下され候様御運策の儀願はしく候、決して御不自由又ハ業務上不便等の儀ハ無之様、小生精々責任上取り計らひ可申候、小生貴地に在らば種々御協議申上げ、便宜立ち働らく可く候へども、唯今ハ何分繁劇にもあり、且つさやうなる自由も得難く候、斯くなさバ衆人の和を得て人を得べんとの御胸算も有之候はゞ何卒御漏らし下さるべく候、都合ニよりにてハ例の老爺(3)ニ呈書仕り、何とかいたさず候てハさし当りてもこの先きも甚だ心配ニ被存候、書中のこと、いづれも世人にハ知らせ難く候、可然奉頼候、早々頓首

十一月廿六日 鶴所  
青山学兄 榻下

先日ハ御令閨留守宅へ御たづね下され候由よろしく御申上げ下さるべく候、ぼうや勉強のこと、被存候、以上

- (1) 小池正直 陸軍々医総監。
- (2) デメンチア dementia. 痴呆。
- (3) 例の老爺 山縣有朋の事。

8 明治37年12月29日 (31号)

(封筒表) 東京本郷弓町 青山胤通殿  
遼東守備軍軍医部長 賀古鶴所  
遼東守備軍軍医部印 (角印)  
(消印 第三軍・37・12・29) (消印 38・1・9)

(軍事郵便)

(封筒裏) 緘 一★一

新年お芽てたう存します、つゞいて二龍山<sup>(1)</sup>も落ち候、今少しの辛ぼうなるべく候、予備病院幫助の一件よろしく頼みあけます、寒さハこれ迄にて最も強かりしハ遼陽あたりのC<sup>(2)</sup>。零下二十七、尚青泥窪<sup>(3)</sup>にて零下十八度なり、風強き夜の兵の辛苦ハ実ニいふニ堪へずです、せめて傷つき病めるものハ充分ニ手あてをしてやりたいものです、ぼうハピアノをかんで機げんよく遊んでいますか、和泉橋同窓会ハ今年はおやめでしやう、よいたばこを度々ありがたう

三十八年一月 青泥窪にて 鶴所  
青山契兄

(写真と花の絵入り用箋) (写真 大石橋ニ於ケル野戦砲兵ノ戦闘 CANNONADE OF FIELD ARTILLERY AT TA-SHIM-CHIAO)  
(明治三十七年日露戦役ニ於テ従軍軍人ニ頒ツ為メ此ヲ製ス 陸軍恤兵部)

- (1) 二龍山<sup>あるらんしゃん</sup> ハルピン市より東の50キロ離れた古城賓州の南西にある。
- (2) C 温度の記号 摂氏。
- (3) 青泥窪<sup>ちんにーわ</sup> 清国遼寧省大連市中山区の大連駅近くにある繁華街。

9 明治38年1月3日 (32号)

(封筒表) 東京本郷弓町 青山胤通殿  
遼東守備軍 賀古軍医部長遼東守備軍軍医部印  
(角印) (消印 38・1・6) (軍事郵便)  
賢兄の御周旋にて新医学士数十人陸軍ニ出身候由、誠ニ辱なく拜謝候、旅順も漸く落ちたり、これより海陸の力彼我平均を得べく候、春迄ニハ一と戦争見度きものニ候、御令閨並ニぼうニよろしく

一月三日 青泥窪 鶴所  
青山契兄

(用箋 弓上に金鵝の図 應陸軍恤兵部需 頼章公敬 頼章 角印)  
(明治三十七年日露戦役ニ於テ従軍軍人ニ頒ツ為メ之ヲ製ス 陸軍恤兵部)

10 明治38年1月10日 (33号)

(封筒表) 東京本郷区弓町二丁目 青山胤通殿  
平安(軍事郵便)

遼東守備軍軍医部印(角印)

(消印 □守備軍・38・1・12 第一野戦□)

(封筒裏) 一★一 一月十日

遼東守備軍 軍医部長 賀古鶴所

海鼠腸<sup>(1)</sup>あり難く御かけにてお正月が来たやうなる心地いたされ申候、一樽ハ明日好便あり森へ送るべく候、幫助一件契兄を初め各地大学の教授の名前新聞紙ニ見え且つ新医学士数十名出身云々御高配辱奉存候、当局者のやり方のまずきハ敢て此件ニ於てのミならず候、惘然の至り齒痒きことのミニ候、旅順の俘虜、士官等停車場迄馬車を馳せ来り婦人と手を組みて降り立つあり様、どうやらちと等は夜会の御迎ヒニでも出たのかしらんと思はるゝ気味無きにあらず候、総ての上ニ於て彼れ<sup>(ママ)</sup>湯とりありて、我にハせゝつこましくものと切廻しをり又頑き姑がよめをいじめる様、小楊子で重箱の角をほじくる様にて快大手腕と豪氣とを欠き居るやうニ思はれ、嘆息の外無之候、又俘虜、立ちなしてもなにかまばゆきやうなる心地せらるゝも妙ニ候、高木兼寛氏満州丸にて渡来、前後二回訪はれ候、いつもながら脚氣論をかつぎ出され候、麦と米の割合が三と七であるのを五分五分ニせよといふ、かはいそうニ三度のめしより外ニ楽みなき兵は当分の米麦のひやめしでハいかに飢ゆるも咽を下るまじく候、先生自ら先づ親験せよにて候、これも極端ニはしり過ぎたる癡論ナルべきか、兎ニ角此春は旅順も開けて満都の人士多少酔ひ加減がよいことであらうと思ひやられ候、廿七八年とハ違ひ昨今天気まことよろしく無風暖、恰も東京ニいるやうなる心地いたされ申候、然し北方ハ氣息ニ鬚髯氷り候由ニ候、前方の兵は穴居のあり様辛苦思ひやられ候、せめて患者なりと出来る丈け手を尽しやり度、外ニ野心は御座なく候、御令聞、ぼうニよろしく

一月十日

ダルニー<sup>(2)</sup> 鶴所

青山契兄

(用箋 富士山と松の図 応陸軍恤兵部需 頼章 公敬 角印 頼章)

(明治三十七年日露戦役ニ於テ従軍軍人ニ頒ツ為メ之ヲ製ス 陸軍恤兵部)

(1) 海鼠腸<sup>このわた</sup> ナマコの腸の塩辛. 酒の肴.

(2) ダルニー 大連か.

11 明治38年5月17日 (23号)

(封筒表) 東京本郷区弓町 青山胤通殿 親展

遼東守備軍軍医部印(角印)

(軍事郵便)(消印 遼東守備軍・38・5・18)

(封筒裏) 封 五月十八日 遼東守備軍

賀古軍医部長(消印38・5・26・后7-10)

拝啓、尔来大御不沙汰御免下さるべく候、先達大島大佐よりの書状に拠れば本年の医科大学卒業者を陸軍ニ出身せしめんと御尽力下され候由、永久になりと、此の戦役間にのミなりとは敢て問はず候、一人も多く出身者の生ずるやう御周旋下され度候、小生の部下ニある軍医のミにて約二百人を算し候、而して其七八分は此の戦役ニ臨みてかり集めたる未熟者にして殆ど用をなさず、唯其数ニ充てしのミ、尔後は大学と高等医学校とより軍医を採用することゝせずば衛生諸機関は活動すまじくと被案候、而して其採用する方法は幾らもこれあるべくと被存候、内科外科衛生科之達人を戦野に迎へ候て各病院各所を巡廻せしめ実物、実事ニ付きて若輩未熟の者を教導せしめ候はゞ材料少き平時ニ於て教練せしむるよりも遙ニ利益なるべくと被存候、現に部下の一両輩をして常ニ各所を巡視せしめ、それぞれ教ふる所あり候、後雖希くは腕利きの助教授諸君の来遊ありて或名義の下ニこの勞を取られんことを望み候、小生は為めニ充分なる御便宜を計り申すべく候、以上二件につきてハ先日大島君迄一寸と所存を申通じ置き候、小池氏不日当地へ再遊する由ニ候、反て不在の方事が捗び可申歟ニ被存候、奉天役<sup>(1)</sup>の仕事は四月初旬ニ於て略終り候、今年ハ脚氣も少く、まだ何に一つ流行病を見ず候、諸軍幸にして頗る健康なるに伴れ病院事業甚だ閑却いたし候まゝ、其人物を四方ニ撒きちらし、専ら悪疫子防ニ従事せしめ候、此の夏休暇に御来遊ありてハいかゞ、汽車も通じ諸事多少便利ニなり候、何か御心づぎのこともあら

ば御教示を請ふ、早々頓首

五月十七日

鶴所

青山契兄 榻下

御令聞並、ぼうによろしく、小川町の方種々御厚配ありがたく存じ候

(1) 明治38年3月満州奉天（現在中国遼寧省瀋陽市）にて日露大会戦あり、日本の勝利に終わる。

12 明治38年10月29日 (3号)

(封筒表) 東京本郷区弓町 青山胤通殿 親展

遼東兵站軍医部長 (角印)

(消印 遼東兵站・38・10・29) (消印 11・6)

(軍事郵便)

(封筒裏) 〆 十月廿九日

遼東兵站監部 賀古軍医部長

先頃の御書ニ対して着後数日して御返事を出せしニ御入手なき由どこへ紛れこみしか、但し別ニ悪口も書いてなかりし故心安く候

拜啓、尔来御不沙汰あしからず、凱旋部隊の輸送設備も先づ調ひ營口のベストハ下た火ニなり今之処あと始末の用位にて、つまらなく其日を過ぎし居り候、先づ還へすものを帰へしてからのそのそと東帰する心組ニ候、構和条件なぞに付きている御高説もこれあるべけれども、小生ハ既に既に思ひ切りをり候、それに今更致し方も無之と被存候、これ等につきてはいづれ帰東の上ニ緩々所見を戦はせ度と存じ候、茅城の老爺<sup>(1)</sup>、此地を過日すぎたれども平時とハ異なりて小生なんぞ緩話する暇ハなきもやうニ候、且つ小生にハ自ら小生の構和観もあり候、彼の老朽爺なぞがたとひ出で逢ふて、かりニ説く所ありともそれに服すべき小生ニハ非らず候、此態は乍憚御放念下さるべく候、煙草、御承知の通り無税故ニ廉なれどもいづれも御互の口に逢ふものハあらず候、つまり敷島とか朝日とかいふ官煙のミに候、葉巻としてハ唯一の La Emperatris manila あるのミ、下等品にて吸はれたものニあらず、これだに在營口のものニ度々請ひやりて漸く手ニ入るといふ始末ニ候、ケふは窓外は銀世界、白いものがホロホロと降りし

きりよいながめニ候、先達三浦守治君<sup>(2)</sup>来り、次で山根<sup>(3)</sup>、片山<sup>(4)</sup>、此度ハ佐藤の進さんも見物ニまいられ候、冬の休ニ御来遊ありてはいかゞ、なかなか興味ある所ニ候、兵隊生活ハ単淡にしておもしろきものニ候、病でも内攻されてハたまらず候、せめてハ此度得たる満韓地方へなりと世人が手を出すやうニあれかしと思ひ候、短日なれども二ケ年間、此の地方ニ在りて種々親捨<sup>(ママ)</sup>せし身にハ此感一層深く覚え候、新聞屋なぞもいふてかへらぬ泣きごとをくりかへす暇にせめてハ満韓の利源を探りてこれを世に紹介してもらひ度く存ぜられ候、紙面は講釈的の口調にて旧戦のもやうを今にかきのせ候なぞ大ニ気ニ入らず候、稀ニハ農商物産等のことを取り調べをるものもある様子ニ候へども、よいこと利益ありさうなることハ秘して、これを紙面に上さぬ徒ありと聞き及び候、己を利することニ敏ニして世を益するニ鈍なるハなげかはしく被存候、又御役所向きより例の視察といふので差遣され来りたる人々の或ハ農、或商、鉦、柞蚕、塩、山林等ニつきて取り調べし上の所観を聞くニ、東大医学部得たるもの少きやうニ覚えられ候、所謂机上の論と東海道御通行的の視察者の所説とハ世を誤まること多かるべくと被存候、不日当監部にて取り調べしものを世ニ公ニさるゝ筈ニ候、○此度又署名改まり関東州総督府といふものニなる由ニ候、兩三日中ニ小生如き予備のものハ此際御役御免ニなるべきの処、貴様ハ此の沿道の事ニ通じているから先づ軍隊を還送し終る頃まで留任してくれ、さう取り計らふからと、いはゆる有終の美を成せといふ有り難いお思しめしニ由り、ナンノ兵隊がかはいゝから出て来たのだものト伴隨院の長兵衛をきめこみ候、先づ来春帰郷する筈ニ候、此役に働いた旧来の軍医、飛び入りのもの其他の医員の材能<sup>(ママ)</sup>、芸術を通観候ニ大ニ医育上寒心すべきことあり候、これは帰つてから篤と御協議をとげたいと思ひ候、之を要するに術が拙劣になりたり、但しこれハ書物と講釈で腹がふくれ実習に餓ている故でもあらう、又菌でもひねくれバそれが最高等の所行のやうに盲信、しいて臨床的の事を軽視するやうなる傾も大ニあり候、それこれにて内科外科ともニ間に合ふもの少き様ニ

覚え候、こまつたことニ候、これにつけても大学  
 はどうしても独立させ、せめて医科ばかりなりと  
 特別經理ニせねばならぬと其实行の手段工夫中ニ  
 候、何卒好き方法を御案出下され、ドコ迄も其实  
 行を迫るやうニ願はしく候、歸へりましたらバ小  
 生も犬馬の勞を尽すべく候、小閑を得つたらぬこ  
 とのミ、早々頓首

十月廿九日

鶴所

青山賢兄 梧下

- (1) 茅城の老爺 山縣有朋の事。  
 (2) 三浦守治 明治14年東大医学部卒業。明  
 治20年より45年まで帝大医科大学病理学教  
 授。  
 (3) 山根正次 明治15年東大医学部卒業。警  
 察医長、内務省検疫医員歴任。済生学舎廃校  
 宣言後日本医学専門学校設立に関与する。  
 (4) 片山国嘉 明治12年東大医学部卒業。明  
 治21年より大正10年まで帝大医科大学法医  
 学教授。

13 明治38年12月15日 (19号)

(封筒表) 東京本郷弓町 青山胤通殿 平信

(軍事郵便) (消印・関東・□・12・15)

(消印・東京・本郷・38・12・23・后6-10)

(封筒裏) 封 関東総督府 賀古軍医部長  
 厳寒の候益御清祥奉大賀候、新聞面に大学教授連  
 の活動ぶりが見え候得共其目的何のであるか明記  
 しあらず、希くは此機会に投じ大学の独立少くとも  
 医科大学の独立、特別經濟の実行をいたすやう  
 ニ御運策下さるべく候、森君は本月末か一月早々  
 東京に入るべくと被存候、菊池の常三郎<sup>(1)</sup>は既に  
 歸京いたせし筈ニ候、小生はどうやら満洲兎に化  
 成せしと見え、寒さなぞニハ一向にめげす至極の  
 んきにくらしをり候、頃日將校くらぶニ球台すわ  
 り晩間大にゲムを争ひ申候、歸へるまでニ勉強い  
 たし候、一つてなミを御見せ申すべくと努めをり  
 候、緒方君<sup>(2)</sup>恙のむしを研究せられし由、どうか  
 此度ハ本ものであつてくれれば好いがと祈り罷在  
 候、スコルブート<sup>(3)</sup>、脚氣これはどうあらうかと  
 被案申候、早々敬具

十二月十五日

鶴所

青山契兄 梧下

ぼうニよろしく、歸へる折ニハ当地のつち人形  
 をおミやニあげます、以上

- (1) 菊池常三郎 明治14年東大医学部卒業。  
 外科医。31年第4師団軍医部長。その後回  
 生病院を設立するも40年陸軍に復職し、陸  
 軍軍医總監、大韓医院長歴任。安政2年生。  
 大正10年没。享年67。(1855-1921)  
 (2) 緒方正規 帝大医科大学細菌学教授。脚氣  
 菌発見と発表して批難を浴びる。  
 (3) スコルブート 壊血病。

14 明治(39)年 月17日 (9号)

(封筒表) 本郷弓町 青山胤通様 親展

(封筒裏) 封 十七日夜 飯田町六ノ廿一

賀古鶴所

何歳で医に成る

大学、高等医学校の卒業者の年令は中を採れば廿  
 七八位でもあらうか、医業につく迄の時を見て仮  
 に数を円くして三十才となす

医の寿命はいくつ

これも様々だが中を採つて先づ人生五十とやら  
 かす、そうすると二十ヶ年である

全国の医数はいくら

四万人、是が四千万人に対して適當なるか、不足  
 か、多過ぎるかは暫らく置キ

$40,000 \div 20 = 2,000$

二十歳で四万を割ると二千が出る、医の就務寿命  
 を仮に二十ヶ年とすると四万の医を補充するには  
 年々二千の筈出すことを要す、一校にて年毎に必  
 らず百人ツゞ筈を出すとは仮定すれば二十校を要  
 す、一級百人と定むるも業を卒へ、及第する者は  
 八九十人の間に在るべき歟、(台湾行き支那等隣  
 国征伐は抜きとするも) どうも二十校ばかり入用  
 である、平均五十五才迄執務するとすれば年毎に  
 一校毎に必らず百人つゞ出すとすると

$40,000 \div 25 = 16$

で十六校を要す、然るに一校毎に八十人位とすれ  
 ばやはり二十校を要す、学生の椅子は裕になして



置きたい、大学二つ<sup>(1)</sup>高医校五<sup>(2)</sup>に名古屋、京都、大阪で漸く十校、熊本、福岡に出来て十二校、高木<sup>(3)</sup>に長谷川<sup>(4)</sup>ので十四である、文部の局長などは医育の事にハ闇に相違ない、であるから此度の事を持ち出すと共に医の畑が二十なくてはならぬといふ事を序に充分にねじこむでほしいと思案、然も此の七ヶ年間に「わるくすると七年後に又々速成医を作らねばならぬといふ愚を再演するやうになりはせぬかと案ぜらる、どうであらう、十四日夜に此の算数の事を川上に一寸と話して置いた、御一考を請ふ

十七日夜  
青山賢兄 梧下  
鶴所

- (1) 東京、京都帝国大学。  
 (2) 千葉、宮城、岡山、金沢、長崎公立医学校。  
 (3) 高木兼寛が設立した東京慈恵医院医学専門学校。前身は成医会講習所。  
 (4) 長谷川泰が設立した濟世学舎。濟世学舎は36年廃校宣言がなされたが、その存続運動の末、45年日本医学専門学校の設立となる。  
 (注) 明治40年に東北帝国大学が設立されている。従ってこの書簡は39年のものか。

15 明治40年12月1日 (20号)  
 (封筒表) 本郷、弓町 青山胤通様 親展  
 (封筒裏) 封 十二月一日  
 麹町区飯田町六ノ廿一 賀古鶴所  
 (消印 本郷・40・12・2)

拝啓、上総長者町小生の草舎の山より漁夫の海に通ふ小路を距て候て南の方、此のもよりにてハ最好の松山、何とかして学兄の用ニ供し度と存じ土地の有力者ニ頼み置き候処、数日前まいり候節ニ其者の来話ニよれば話が成り立つ由ニ候、就てハ第二日曜日、八日ニ御見物かたがた御出遊いかゞニ候や、第三日曜日ハ小生さしつかへ申候、春に入らぬ中ニ即ち年末ニ話をつけ候方諸事都合なりと申居り候、朝八時ニ兩國を発し候へハ十二時ニハ着すべく候、来春よりハ三時間にてまいられる筈ニ候、帰へりハ三時と八時との汽車いづれにても其時の都合にて御撰び可然と奉存候、今晚拝

訪仕り度存ぜしかど急ニさしつかへ生じ、明晩もさしつかへ候まゝ一寸と一筆申上げ候、承はる処ニよれば弘田長君<sup>(1)</sup>も大原あたりをさがされしことある由ニ候、大原にハよき所無一の宮も同様ニ候、御都合ニよりにてハ同君をも御伴ひ被遊候てハいかゞ、其外にもよき箇所ハ見あたり申候

(森鷗外・賀古鶴所の別荘地図あり)

乍憚御都合の程小川町へ電話にて御申聞け下さるべく候、早々不備

十二月一日  
青山学兄 梧下  
賀古

- (1) 弘田長<sup>つかさ</sup> 明治13年東大医学部卒業、22年より大正10年まで帝大医科大学小児科教授。

16 明治 年6月24日 (4号)  
 (封筒表) 本郷弓町 青山胤通様 親展  
 (消印 □・6・2□)

(封筒裏) 封 廿四日夜  
 飯田町六ノ廿一 賀古鶴所

拝啓、帝国医科大学の衛生教室の一と棟を焼き払ふやにいひ伝ふ、真なりや、ベスト故にといはゞ遂には全大学、全市を焼き払ふべき歟覚束なし、神戸の某村を焼き払はねばならぬと大森や北里(?)の騒ぎし時に正を乗りてこれに反対せしは誰れなりしや、ハワイ政府が日本町をも焼き払ひたるを正理と黙許すべきや、衛生教室を焼かれんとす、医科大学の一教室を焼かれんとす、其故を問へばベストの予防滅却といひ伝ふ、ベストの滅却、予防には正当なる手段なきや、焼き打ちの外に手段なきや、争ふて聴かれざれば何ぞ去らざるである、当事者は焼かれぬ前に断決がなくてはなるまい歟と思ふ、以ていくぶんか医科大学を清うしてもらひ度と存じ候、誤聞にてあらんことを希望候、頃日俗事紛々拜晤の暇を得ず、早々不備

六月廿四日夜  
青山賢兄 榻下  
賀古

17 明治(45)年7月13日 (12号)  
 (封筒表) (本) 郷弓町 青山胤通様  
 (封筒裏) 封 小川町にて 賀古鶴所

先刻電話にて承はり候儀、表面ハ成る程浜尾男<sup>(1)</sup> 当人之決心次第之様ニ候へども、実ハ教授諸君の決心次第ニ相成り候やうニ被存候、当人の為めにハ惜まれ候て、此際勇退致し枢府ニ入り老養候方安全なるべく候、それを止<sup>(ママ)</sup>やさせ候て総長にかつぐ以上ハ末長くかつがねハならず、既に六十の老爺なるを古稀までもいつ迄も総長として仰がねハならぬ義理合ニ相成るべくと被存候、さすがハ老公之ふるまひ話ハ軟くして融通ハつけあれども断行ハ教授諸君の決心<sup>(ママ)</sup>に儘かせるといふはめニ相成り、老練のやり口恐れ入つたものと被存候、大に六敷相成り候やう相覚え候、一寸と閑暇を得候まゝ愚意申述候、あしからず、早々

七月十三日

鶴所

青山学兄 梧下

- (1) 浜尾男 男爵<sup>はま お ちからた</sup> 浜尾新。慶応義塾、大学南校に学ぶ。明治10年東大法文理3学部綜理補。帝国大学総長、文部大臣。38年より大正元年8月まで東京帝国大学総長。枢密院議長。嘉永2年生。大正14年9月没。享年77。(1849-1925)

18 大正3年6月7日 (7号)

(封筒表) 本郷区弓町 青山胤通殿 親展

(封筒裏) 封 牛込区矢来町一 賀古鶴所

(消印 3・6・7)

新聞紙上ニ早稲田主相<sup>(1)</sup>と一木文相<sup>(2)</sup>とが大学の形の上ニ付て何か協議をなしたる如く伝ふ、もとより真偽不明にハ候へども、総合とか単立とかいふ事ハ実以て無意味なり、○大学独立自営若し不能ならばいつそ各分科と尔来称し来りたるものが悉く其教授の方法、兼々経済ニ於て独立自営するを最善と思はれ候、○従来よく聞く処の老人説にハ仏に学びたる教授ハ邦人をして恰も仏人たらしめんとす、米英独に学びたるものも亦然り、如斯して学者ハ学問を以て我が国を亡すものなり

云々、何ぞ知らんや、法、医、理、文其学ぶ所ニ於てハ、インテルナショナルなるを既ニ中学、高等学校ニ於て、われハこれ日本人たりとの智識と観念とを充分に養ひ得たるものハ、是れ一箇の国士たり、此者己が好む所の専門科たる、法、医、理、文いづれをなりと撰び学びたりとて、人格上コンモンセンスを既に備へ得たる上の事故少しもアブナゲは無き訳なり、然も尚アブナシといはず、そハ専門科たる大学の責任にハ非らずして、或ハ中学、高校ニ欠けたる所ある故ならんか、以上老人の言ハ一ハ大学教授を呪詛する者の誣言をあやまり信じたる罪なりといふべし、御ぬかりハこれあるまじく候へとも、機に乗じて可然御運策希望ニ耐へず候、然し老伯<sup>(3)</sup>もくせもの故、大学問題にて内輪をがたつかせハすまいが、万が一がたつかせずニ一進することを得バ甚た妙なり、且つ此の問題ハ余リニがたつかせずニ済むかも知れずと被存候、御高見如何

青山契兄 梧下

- (1) 早稲田主相 大隈重信の事。この時第2次大隈内閣総理大臣を勤める。  
 (2) 一木喜徳郎<sup>いちき きとくろう</sup> 慶応3年遠江国に生まれる。明治20年東大法学部卒業。東大法学部教授、法制局長官、文部・内務・宮内大臣歴任。男爵。昭和19年没。享年78。(1867-1944)  
 (3) 老伯 大隈重信の事。この時大隈重信は伯爵。大正5年侯爵に陞爵。

(賀古鶴所の書簡は次号に続く)

#### 【主要参考文献】

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行  
 鶴崎熊吉編『青山胤通』青山内科同窓会 1930年5月8日発行  
 泉孝英編『日本近現代医学人名事典 1868-2011』医学書院 2012年12月5日発行  
 『会員氏名録』東京大学医学部鉄門倶楽部 2001年発行